【研究１－1】

研究課題

子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因

1. 緒言

子どもを育てる環境は、1950年代までは同居の祖父母や隣家など、婦夫（子どもの親）以外に子育てに協力してもらえる人が身近にいた。しかし、時代は核家族化が進み子育ては基本的に夫婦だけで行う環境に変わった。子育ては夫婦で一緒に協力しなければうまく行かないと考えるが、男は仕事、女は家庭という役割分担で表面上うまく回って行き、それがいつのまにか子育ては母親の仕事という固定観念が出来上がっている。

育児に参加していく関係性を指す言葉に、“コペアレンティング“がある。コペアレンティングは「（離婚後の）共同養育、共同子育て」と訳され、「夫婦関係を基盤に母親と父親が互いに子育てを支え、子どもに安定した生育環境を提供するために協力し合うこと」とされ、子育てを母親だけに任せるのではなく、父親も一緒に参加して夫婦で協力し合って子育てを行う意味もある。また、両親が親としての役割をどのように一緒に行うのかということ、さらに広くその子どもの世話と養育に責任を負うべき複数の養育者が共有する行為とされている[1)]。

1995 年頃より海外で二人親家庭にコペアレンティングの概念が導入されて研究がすすめられており、母親が父親の育児関与を妨げる直接間接の原因となりうる。つまり性役割観が強い母親は、父親の育児関与が低いことが明らかにされている[2)]。

研究者として長年取り組んできた子育ての研究において、母親が育児をしていて感じる、ストレス、幸福感、自信は、夫の関りが大きいことが明らかにされている[3)]。 また、妻が認知する夫からのサポートは子どもの成長とともに低下していることも明らかにされている[4)-7)]。そして、夫婦の親密性も低下している[8)]。

我が国の子育て研究は、支援の評価や、父親の養育行動など父母別に検討するものが圧倒的に多い[9)10)]。あるいは父母の行動の差異や父母役割の調整行動の検討[11)12)]など、子育て生活における夫婦関係を扱うものもあるが[13)]、子どもに対する実際的なかかわりの協働やその調整については報告されていない。

コペアレンティングを進めることは、共働き夫婦が円満な関係を築くことになり、子どもの成長にも大いに良い影響を与える[14)]。 父親の育児関与を阻んでいる要因や夫婦のコペアレンティングを明らかにし父親の育児関与を増加させる課題があると考える。

本研究においては、コペアレンティングの視点から発展的に進め、ペアとしてとらえた夫婦の子育てにおける夫婦間調整の研究に踏み込んで、望ましい子育て環境を整えていくための介入プログラムの提案を目指した研究の第一歩とした。

2. 研究目的

母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動「夫婦のペアレンティング調整」について、実態と夫婦のペアレンティング調整に対する認識、夫婦の調整行動の関連要因を明らかにする。望ましい子育て環境を整えていくための介入プログラムを提案することを目指したい。

3. 研究方法

(1)調査対象

3 歳から 4 歳の子どもをもつ母親と父親計 1062 人に調査用紙を配布した。

(2)調査期間

調査期間は 2018 年 10 月から 2018 年 12 月であった。

(3)依頼方法

X 県に位置する幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力のお願い文と共に質問紙を同封し,直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。父母それぞれへの質問紙の依頼文には、回答後母親と夫の質問紙を別の封筒に入れて封をして園またはセンターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収 BOX にいれ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合研究への同意が得られたものとした。

(4)研究デザイン

尺度を用いた選択的回答並びに記述式質問項目による自記式質問紙調査

(5)調査内容

選択的回答

✧ 清水らによる尺度（育児幸福感尺度短縮版[15)]、育児ストレス尺度短縮版[16)]）

子育てをしていて感じる幸せな気持ちについて

・子どもとの絆

・育児の喜び

・夫への感謝

子育てをしていてつらいと感じることについて

・心身的疲労

・育児不安
・夫の支援のなさ

✧ 子どもが生まれる前に親としての実感の有無
✧ 出産後の生活のイメージの有無
✧ 里帰り出産により夫婦別生活の有無

✧ 母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動について夫婦ペアレンティング調整尺度[12)]
・促進行動
・批判行動
✧ 自分の性格について自己志向的完全主義尺度[17)]
・高い目標
・完全でありたい
・ミスを気にする
・自分の行動に漠然とした疑いをもつ

✧ ジェンダーに関する影響が示唆されていることから[11)]
結婚の現実尺度[18)]の認識について
・相思相愛
・夫への理解・支援
・妻への理解・支援

✧ 夫婦の話し合いが関係していることから[17)]
子どもが生まれてからの生活についての話し合い
・話し合いの有無
・話し合いの時期
・話し合いの頻度
・話し合いの内容に納得したか

自由記述式回答
✧ 育児行動を批判されたときどのように感じ受け止めたか
✧ 批判的な行動の背景にあるものについての考え
✧ 結婚後相手の生活態度に変化について　感想も含む
✧ 年齢
✧ 子どもの人数
✧ 子の年齢
✧ 同居家族
✧ 就労形態

(6)研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、回収した後は番号化して処理し、調査・分析終了後はデータを研究結果公表後シュレッダー破棄することを明記した。倫理審査は名古屋学芸大学倫理委員会の審査を受け平成 29 年に承認(#274)を得た。

4. 結果

(1)対象者の属性と子育て状況

調査用紙の回収は 516 人であったが、うち母子家庭の母親 3 人と欠損解答のあった 14 人を分析対象から外した。母親 291 人(64.8%)、父親 208 人(46.3%)であり、計 499 人(有効回答率 47.0%)のデータを分析対象とした。結果を以下の表 1 に示す。

表1　対象者の基本属性　N=499

	母親n=291		父親n=208	
	mean±sd			
年齢	37.2±4.5		39.5±=5.8	
子ども数	2.1±0.71		2.1±0.7	
末子年齢	3.3±1.8		3.3±1.8	
夫婦の年齢差	3.0±3.5		3.0±3.4	
職業				
家事従事	151	51.9%	1	0.5%
フルタイム	11	3.8%	195	88.9%
パートタイム	98	33.7%	0	0.0%
その他	23	7.9%	22	10.6%
育休中	8	2.7%	—	—
家族形態				
核家族世代	268	92.1%	193	92.8%
三世代世帯	23	7.9%	15	7.2%
出産前親としての実感				
有	91	31.3%	37	17.8%
無	196	67.3%	169	81.3%
未回答	4	1.4%	2	1.0%
出産後の生活のイメージ実際と変わらない				
はい	57	19.6%	64	30.8%
いいえ	231	79.4%	141	67.8%
未回答	3	1.0%	3	1.4%
出産は里帰りしばらく分かれて生活した				
はい	166	57.0%	115	55.3%
いいえ	124	42.6%	92	44.2%
未回答	1	0.3%	1	0.5%

（ー）非該当

出産前に親としての実感をもっていた母親は父親より多く、産後の生活イメージとのギャップを感じていたものは父親より母親が多く、79.4%と8割近くが感じていた。

(2)夫婦ペアレンティング調整パターンとの比較と関連

夫婦ペアレンティング調整尺度得点を「促進行動が低く批判行動も低い」「促進行動が低く批判行動が高い」「促進行動が高く批判行動が低い」「促進行動が高く批判行動も高い」の 4 パターンに分類した。結果を以下の表 2 に示す。夫婦ペアレンティング調整 4 パターンの割合において父母間での差はなかった。

表2　夫婦ペアレンティング調整4パターンの母親父親別割合　　N=499

	n	促進―批判				χ^2
		低群―低群	高群―低群	低群―高群	高群―高群	
母親	291	71 24.4%	80 27.5%	79 27.1%	61 21.0%	ns
父親	208	56 26.9%	57 27.4%	59 28.4%	36 17.3%	

χ^2検定:ns (not significant)

*4パターンのグループ分けの基準値
母親　促進低群：30点未満、高群：30点以上
母親　批判低群：18点未満、高群：18点以上
父親　促進低群：30点未満、高群：30点以上
父親　批判低群：17点未満、高群：17点以上

次に各尺度並びに属性において夫婦ペアレンティング調整４パターンの比較をKruskal-Wallis test(クラスカル・ウォリス検定)その後多重比較:Dunn 検定を行った。結果を表３に示す。

４パターンについて有意水準 5%未満で有意差が認められた項目は、母親では育児幸福感の「夫への感謝」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」結婚の現実の「相思相愛」「妻への理解・支援」「夫への理解・支援」であった。父親は育児幸福感の「育児の喜び」「夫への感謝」、育児ストレスの「心身的疲労」「育児不安」、結婚の現実の「相思相愛」「妻への理解・支援」「夫への理解・支援」であった。

育児幸福感、結婚の現実の得点が最も高いのは、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンであり、育児ストレス得点が最も高いのは「促進行動が低く批判行動が高い」パターンであった。

年齢、子どもの数、末子年齢、夫婦の年齢差は 4 パターンにおいて有意な差はなかった。

表3　夫婦ペアレンティング調整パターンと心理状態等の比較と　　N=499

		母親 n=291					父親 n=208				
		促進―批判					促進―批判				
	高低群	低―低	高―低	低―高	高―高		低―低	高―低	低―高	高―高	
	n	71	80	79	61		56	57	59	36	
		Median				p	Median				p
育児幸福感	子どもとの絆	17.0	18.0	17.0	17.0		17.0	18.0	16.0	17.5	
	育児の喜び	24.0	25.0	24.0	24.0		23.0	25.0	24.0	24.5	*
	夫への感謝	17.0	19.0	16.0	18.0	*	16.0	19.0	16.0	18.0	*
育児ストレス	心身的疲労	17.0	16.0	17.0	16.0		11.0	10.0	13.0	11.0	*
	育児不安	14.0	11.0	16.0	12.0	*	12.0	9.0	14.0	11.0	*
	夫の支援のなさ	10.0	7.0	14.0	7.0	*	10.0	8.0	9.0	10.0	
自己完全主義的志向	高い目標	15.0	17.0	16.0	16.0		18.0	20.0	19.0	19.5	
	完全でありたい欲求	14.0	16.0	15.0	17.0		16.0	18.0	16.0	18.0	
	ミスを気にする	13.0	13.0	13.0	13.0		11.5	12.0	13.0	13.5	
	自分の行動に漠然とした疑いを持つ	16.0	18.0	18.0	18.0		17.0	18.0	18.0	19.0	
結婚の“現実”	相思相愛	16.0	17.0	15.0	16.0	*	15.0	16.0	14.0	15.0	*
	夫への理解・支援	15.0	16.0	13.5	14.0	*	12.0	15.0	12.0	14.0	*
	妻への理解・支援	13.0	15.0	13.5	14.0	*	14.0	15.0	14.0	15.0	*
属性	年齢	38.0	37.0	37.0	37.0		38.0	38.5	39.0	40.0	
	子の数	2.0	2.0	2.0	2.0		2.0	2.0	2.0	2.0	
	末子年齢	4.0	3.0	4.0	3.0		3.5	3.0	4.0	4.0	
	年齢の差	2.0	2.0	2.0	2.0		2.0	2.0	2.0	2.0	

*: Kruskal Wallis 検定　p<0.05
⊔多重比較：Dunn 検定　調整済み有意確率で有意差が認められたもの

(3)夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況

夫婦の子育てに関する話し合いの状況について表4－1，4－2に示す。夫婦ペアレンティング調整４パターンとの関連について、母親は「話し合いの有無」、「話し合いの頻度」、「話し合いで納得」に有意な関連があると判断された。一方、父親は、すべての項目において有意な関連はなかった。

表4-1 夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況等との関連 N=499

		母親										
		促進—批判										
	高低群	低—低		高—低		低—高		高—高		χ^2	p	
話し合いをした	ない	23	7.9%	10	3.4%	20	6.9%	2	0.7%			
	調整済み残差	3.3		-1.7		1.7		-3.5		22.40	p<.01	*
	ある	48	16.5%	70	24.1%	59	20.3%	59	20.3%			
	調整済み残差	-3.3		1.7		-1.7		3.5				
結婚した時	いいえ	40	16.9%	59	25.0%	51	21.6%	47	19.9%	1.03	.79	
	はい	8	3.4%	11	4.7%	8	3.4%	12	5.1%			
妊娠した時	いいえ	28	11.9%	29	12.3%	36	15.3%	30	12.7%	5.85	.12	
	はい	20	8.5%	41	17.4%	23	9.7%	29	12.3%			
出産後	いいえ	10	4.2%	20	8.5%	13	5.5%	15	6.4%	1.19	.75	
	はい	38	16.1%	50	21.2%	46	19.5%	44	18.6%			
家族形態	核家族世代	66	22.7%	71	24.4%	74	25.4%	57	19.6%	1.72	.63	
	三世代世帯	5	1.7%	9	3.1%	5	1.7%	4	1.4%			
就労している	いいえ	42	14.4%	42	14.4%	38	13.1%	37	12.7%	2.99	.39	
	はい	29	10.0%	38	13.1%	41	14.1%	24	8.2%			
話し合いの頻度	数えきれないほど	28	9.6%	43	14.8%	31	10.7%	47	16.2%			
	調整済み残差	-2.3		0.5		-2.5		4.5		24.9	p<.01	*
	5回程度以下	43	14.8%	37	12.7%	48	16.5%	14	4.8%			
	調整済み残差	2.3		-0.5		2.5		-4.5				
話し合いで納得	した	30	10.3%	57	19.6%	25	8.6%	40	13.7%			
	調整済み残差	-1.9		4.0		-4.3		2.3				
	しない・どちらでもない	41	14.1%	23	7.9%	54	18.6%	21	7.2%	32.2	p<.01	*
	調整済み残差	1.9		-4.0		4.3		-2.3				
親の実感はあった	はい	17	5.9%	34	11.8%	25	8.7%	15	5.2%	7.34	.06	
	いいえ	52	18.1%	46	16.0%	52	18.1%	46	16.0%			
産後イメージ通り	はい	13	4.5%	20	6.9%	12	4.2%	12	4.2%	2.29	.51	
	いいえ	57	19.8%	60	20.8%	65	22.6%	49	17.0%			
里帰りで別居	はい	43	14.8%	45	15.5%	41	14.1%	37	12.8%	1.34	.72	
	いいえ	28	9.7%	35	12.1%	37	12.8%	24	8.3%			

χ^2検定

表4-2 夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況等との関連 N=499

		父親										
		促進—批判										
	高低群	低—低		高—低		低—高		高—高		χ^2	p	
話し合いをした	ない	16	7.7%	9	4.3%	11	5.3%	4	1.9%			
	調整済み残差									5.12	.16	
	ある	40	19.2%	48	23.1%	48	23.1%	32	15.4%			
	調整済み残差											
結婚した時	いいえ	32	19.0%	35	20.8%	38	22.6%	26	15.5%	1.05	.78	
	はい	8	4.8%	13	7.7%	10	6.0%	6	3.6%			
妊娠した時	いいえ	26	15.5%	27	16.1%	28	16.7%	20	11.9%	0.84	.84	
	はい	14	8.3%	21	12.5%	20	11.9%	12	7.1%			
出産後	いいえ	12	7.1%	13	7.7%	12	7.1%	9	5.4%	0.27	.96	
	はい	28	16.7%	35	20.8%	36	21.4%	23	13.7%			
家族形態	核家族世代	50	24.0%	53	31.5%	55	32.7%	35	20.8%	2.1	.55	
	三世代世帯	6	2.9%	4	2.4%	4	2.4%	1	0.6%			
就労している	いいえ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.6%	4.8	.18	
	はい	56	26.9%	57	33.9%	59	35.1%	35	20.8%			
話し合いの頻度	数えきれないほど	21	10.1%	32	19.0%	25	14.9%	21	12.5%			
	調整済み残差									6.26	.09	
	5回程度以下	35	16.8%	25	14.9%	34	20.2%	15	8.9%			
	調整済み残差											
話し合いで納得	した	27	13.0%	37	22.0%	30	17.9%	20	11.9%			
	調整済み残差											
	しない・どちらでもない	29	13.9%	20	11.9%	29	17.3%	16	9.5%	3.71	0.29	
	調整済み残差											
親の実感はあった	はい	11	5.3%	9	4.4%	11	5.3%	6	2.9%	0.35	0.95	
	いいえ	45	21.8%	48	23.3%	47	22.8%	29	14.1%			
産後イメージ通り	はい	19	9.3%	19	9.3%	13	6.3%	13	6.3%	3.06	0.38	
	いいえ	36	17.6%	38	18.5%	45	22.0%	22	10.7%			
里帰りで別居	はい	23	11.1%	36	17.4%	36	17.4%	20	9.7%	6.25	0.1	
	いいえ	32	15.5%	21	10.1%	23	11.1%	16	7.7%			

χ^2検定

5. 考察

(1)夫婦ペアレンティング調整パターンと互いの認識

夫婦が互いに協力しあう姿勢をもって子育てを行うことが子どもや家族にとってポジティブな効果をもたらすことが明らかにされている[14]。コペアレンティングは夫と妻がそれぞれ最適と信じる子育てをバラバラに行っているだけでは成立しないとされている[19]。

今回、夫婦ペアレンティング調整は「促進行動が低く批判行動も低い」「促進行動が低く批判行動が高い」「促進行動が高く

批判行動が低い」「促進行動が高く批判行動も高い」の4パターンに分類し支援への示唆を導き出そうとした。夫婦ペアレンティング調整の4パターンに着目すると母親、父親のパターンに有意な差はなかった。父親の調査結果は、母親の自分(父親)に対する育児参加への促進行動と批判行動について、どのように受け止めているかを質問している。母親自身の認識と、父親が受け止めた母親の行動の認識には差がなく、母親父親間の認識にずれがみられないことが明らかになった。

親になると夫婦二人だけの時の、自由で和気あいあいとした親密の感情は低くなり、母親になると夫に対して頑固になり、喧嘩した場合感情的になることが、結婚 2〜3 年目頃多くなる傾向がある [20]。そんな中でも子育てについては、互いの行動に対する認識にずれがないことから、生活の真ん中に「子育て」という事柄が、客観的に認識されていることが推察される。

(2)夫婦ペアレンティング調整の4つのパターンの比較と関連

本研究により父親の子育て関与に対する母親の調整行動として、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンの母親は、育児幸福感が高く、育児ストレスが低いことが明らかとなった。つまり育児をしていて感じる幸福な気持ちが高く、育児へのストレスが少ないことであり、尺度の解釈からも心理状態は良いことが伺える。さらに話し合いに納得していること、結婚観である相思相愛や夫妻への理解・支援が有意に関連しており、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンに近づけるための支援の方向が示唆された。

母親による父親の家庭内役割を重視する考えや、母親の認知する父親の育児コンピテンス(スキル)の高さが父親の育児関与にかかわることが示されており [21]、こうした「促進行動が高く批判行動が低い」パターンの背景に母親の家庭内役割や父親のコンピテンスへの認識が関係していることも推察されることから支援のための検討が課題となる。

さらに、父親の「促進行動が高く批判行動が低い」パターンは結婚の現実である「夫への理解・支援」、「妻への理解・支援」が高いことが示されていた。「妻への理解・支援」に加え、「妻の夫への理解・支援(心からの尊敬、能力才能を認め伸ばすために助ける、仕事、活動を理解し支える、夫を立てる)」の結婚観をもつことによって、夫は妻を信頼し相手に対してオープンな心理状態を示すと考えられ [18]、促進行動が高く、批判行動が低くなっていると考えられた。妻が夫への感謝の気持ちを持っていることを父親が受け止められていることから、互いの関係性がうまくいっていることが伺える。

夫も妻も「相思相愛」により、促進行動が高くなり、批判行動は少なくなっている。すなわち互いの信頼や尊敬愛情に対して大切にする結婚観により、促進行動は当然のこととして見られているが、批判行動が低く、促進や批判と異なる行動が現れてくるのではないかと考える。

子どもが一人目であるより、二人目になるほうが性役割分業は進むと考えられる中で [17]、夫婦の関係性に関係すると考えられる結婚観が、こうした性役割分業観を乗り越えることが可能となると考えられる。また、母親が「促進行動が高く批判行動も高い」パターンでは、話し合いを数えきれないほど行っている。このことから、夫婦のコミュニケーションは良好であると考えられ、コミュニケーションがスムーズであることは、「促進行動がいつもある」に加え「批判行動もいつもある」とが推察される。一方、「促進行動が低く批判行動が高い」パターンは、夫の支援が少なく、育児不安が高く、夫への感謝が低い特徴があり心理状態はネガティブと考える。また、この時期の母親は育児への自信が低くなる [3]ことからも「育児への自信」が関係していることが推察された。促進行動が低く批判行動が高い母親が、父親の育児関与を妨げる直接間接の原因となりうる [2]ことから、今後「夫の育児関与に対する考え」について母親への聞き取り調査を行い、父親の育児関与増加を阻んでいる要因について明らかにしていきたい。

夫婦ペアレンティング調整が良い形で行われるためには、あらかじめ結婚観に対する意識を高めるためのプランと共に、子育ての話し合いで納得できるものとすることが効果的な介入の重要な視点と考えられる。

一方で自己完結型の完全主義は、夫婦のコペアレンティングに影響していないことが明らかとなった。自己志向的完璧主義は、自己の枠組みの中で完全主義という概念を多次元的にとらえており、促進と批判の組み合わせによる4つのパターンでは、明確な関係性は見られなかったと考えられる。

今回、夫婦ペアレンティング調整を4パターンで検討するという試みは、夫婦ペアレンティング調整の姿を実態に即したパターンという新たな視点からとらえることができたと考える。

6. 結論

夫婦ペアレンティング調整の促進行動と抑制行動の 4 パターンにおいて、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンが最も良好な心理状態と示された。さらに、このパターンの母親は、子育ての話し合いが行われており、夫の考え・行為を理解し、もっともだと認める、つまり「納得」している。また、“結婚の現実”「夫への理解・支援」「妻への理解・支援」「相思相愛」すべてにおいて、夫に対する思いが高い特徴があった。

母親が父親の子育て関与への批判行動を抑え促進行動を強化するために夫婦の結婚観への働きかけや子育てに関する話し合いによる「納得」が重要な視点になることが示唆された。

引用文献

1) Mchale JP, Khazan l, Erera P, et.al..Copareenting in Diverse family systems.In Bornstein, M.h. (ED)Handbook of parenting 2nd ed.:Vol3 Being and becoming a parent.Hillsdale,NJ: Lawrence Erbaum Associates,Inc.2002,2, 75-107.
2) McBride BA., Brown GL, Bost K K, et al. Parental identity, maternal gatekeeping, and father involvement. Family Relations.2005, 54,60-272.
3) 清水嘉子. 乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究.日本助産学会誌.2017, 31(2),120-129.
4) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討.心理学研究.2014, 84(6), 566－575.
5) 加藤道代. 子育て初期の母親の養育意識・行動とサポート資源.国立婦人教育会館研究紀要 .1999, 3,53-59.
6) Benesse 次世代研究所. 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査-妊娠期から子どもが2歳になるまでの家族の成り立ちを探る.2011, 1-117.
7) ベネッセ教育総合研究所.乳幼児の父親についての調査.2016.
8) 小野寺敦子. 親になることにともなう夫婦関係の変化.発達心理学研究.2005, 16(1), 15-25.
9))牧野考俊,金泉志保美,伊豆麻子, 他.父親の育児に関する研究動向と今後の課題.小児保健研究.2011,70(6),780-789.
10) 藤本美穂,今西誠子.子育て支援に関する文献検討－実施した事業の効果に焦点を当てて－健康医療学部紀要,2016, 1, 73-81.
11) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題－夫婦ペアレンティングの理解のために.東北大学院教育学研究科研究年報. 2012, 61(1), 109-126.
12) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. コペアレンティング－子育て研究におけるもう一つの枠組み.東北大学院教育学研究科研究年報.2014, 63(1), 83-102.
13) 佐々木裕子, 高橋真理.父親から見た無第一子出生前後における夫婦関係の評価－家族イメージ法による分析を中心に-.家族看護研究.2007, 13(1), 53-59.
14) 中川まり.共働き夫婦における妻の働きかけと夫の子育て・家事参加.人間文化創成科学論叢.2010, 305－313.
15) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子. 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発, 日本助産学会誌.2010, 24(2), 261-270.
16) 清水嘉子. 子育て環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究. ストレス科学.2001, 16(3), 176-186.
17) 桜井茂男,大谷佳子. “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係.心理学研究. , 1997 68(3), 179-186.
18) 柏木恵子, 平山順子. 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性－妻はなぜ不満か－心理学研究.2003, 74(1), 122－130.
19) Feinberg M..The internal Structure and ecological context of coparenting.A framework for research and intervention. Parenting: Science and Practice. 2003, 12,1-21,
20) 小野寺敦子. 親になることにともなう夫婦関係の変化.発達心理学研究.2005 , 16(1), 15-25.
21) Rane, T.R.,&Mcbride,B.A. Identity theory as a guide to understanding fathers’ involvement with their children.Journal of Family Issues,2000,21(3),347-366.
22) 永井暁子. 終章 対等な夫婦は幸せか. 松田茂樹編. 対等な夫婦は幸せか. 東京, 勁草書房. 2007, 137-144.

清水嘉子. 子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因.. 母性衛生, 2020, VOL61 No2, 340-351. 一部加筆

【研究１－2】

研究課題

育児期にある夫婦ペアレンティング

－互いの批判をめぐって－

1. 緒言

父親の情動の特徴は、同情、誇り、安心、希望、感謝であった（清水，2006a）。特に同情、誇り、安心は母親に比べて父親が高かった。父親の育児幸福感は、あくまでも子どもを中心とした育児事情ではあるが、妻に対する同情や誇り、感謝の情動がみられていた。夫は子どもと接する機会が少ないためか、喜びや愛情の育児事情は少なかった。夫に対して、遊びを通して子どもと関わる時間を増やして関係性を保つこと、妻と子どものことを愛すること、家族との時間を大切にしていくこと、妻に対する感謝や誇りの感情を言葉で伝えていくことが支援として有効であると考えられた。

母親が育児をより安定して行うために夫が重要な役割を果たしていると考える。夫の家事・育児協力時間が多く、具体的な育児協力のある夫の妻は育児ストレスが低く（清水，2003a）、夫婦関係満足度も高まる（田中，2014）。家事・育児時間が長い男性ほど夫婦の役割分担に関する話し合いの結果について「夫婦の適切な役割分担について、納得した」と回答している（清水，2003a）。また、子どもの成長とともに育児への自信がなくなることからも（清水，2017）、出産後早い段階で互いの協力に対する話し合いも重要になってくる。この時期に改めて夫婦の役割分担の話し合いを持つことが大切になる。加えて、縦断研究により１歳半の子どもをもつ母親が夫に打ち明けて相談できることで、育児への自信を高めることに影響していることが明らかとなり、この時期の夫婦を対象としたプランが有効であると考える（清水，2017）。夫婦ペアレンティングの促進行動は、育児期にお互いが考えていることや求めていることへの理解を深め、コペアレンティングの視点（加藤他，2014a；加藤他 2014b）から、夫婦で互いを理解し助け合い、互いに影響し合いながら、親としての役割をどのように行っていくかを追求し、より良い子育てを可能とすることを目指す重要な行動と言える。今後は縦断調査や質的調査によって父親の育児関与増加を阻んでいる要因や夫婦ペアレンティングを明らかにする課題がある（青木，2009）。

2. 研究目的

妻の批判行動に目を向け夫婦ペアレンティング研究として、どのようなペアレンティングが繰り広げられているのかを明らかにする一助として、夫婦がお互いの育児への言動を批判する働きについて取り上げ、互いが相手から批判された時の心理や批判の根底にある考えを明らかにすることを目的とした。

3. 研究方法

(1)調査対象

３歳から４歳の子どもをもつ夫婦 1062 名に調査用紙を配布した。

(2)調査期間

調査期間は 2018 年 10 月から 2018 年 12 月であった。

(3)依頼方法

幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力のお願い文と共に質問紙を同封し直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。父母それぞれへの質問紙の依頼文には、回答後母親と夫の質問紙を別の封筒に入れて封をして園またはセンターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収 BOX にいれ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合研究への同意が得られたものとした。

(4)研究デザイン

質的記述的研究

(5)調査内容

行われた調査において質的なデータと話し合いの実態に着目した。

選択的回答

✧　子どもが生まれてからの生活についての話し合い
- ・話し合いの有無
- ・話し合いの時期
- ・話し合いの頻度
- ・話し合いの内容に納得したか

自由記述式回答

✧　育児行動を批判されたときどのように感じ受け止めたか
✧　年齢
✧　子どもの人数
✧　子の年齢
✧　同居家族
✧　就労形態

(6)研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、調査・分析終了後はデータを破棄することを明記した。倫理審査は研究者の所属する機関内の倫理委員会の審査を受け2018年に承認（#274）を得た。

4. 結果

調査用紙の記述による回答項目に記載のあった妻は185人、夫140人計325人であった。結果を以下の表に示す。

(1) 対象者の属性と育児状況

表1 対象者の属性

		母親 n=185		父親 n=140	
		mean±sd			
年齢（歳）		37.5±4.7		39.4±=6.0	
子ども数（人）		2.1±0.7		2.0±0.7	
末子年齢（歳）		3.2±1.9		3.0±1.9	
職業家事従事		99	53.5%	1	0.7%
	フルタイム	6	3.2%	125	89.3%
	パートタイム	59	31.9%	0	0.0%
	その他	11	5.9%	14	10.0%
	育休中	10	5.4%	非該当	
家族形態					
核家族世代		168	90.8%	128	91.4%
三世代世帯		17	9.2%	12	8.6%

(2) 育児に関する話し合いの状況

表2 夫婦の子育てに関する話し合いの状況

		妻				夫			
N（人数）		185				140			
話し合い		した		しない		した		しない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
		152	82.2	33	17.8	123	87.9	17	12.1
時期	結婚した時	した	23	15.1		23	18.7		
		しない	129	84.9		100	81.3		
	妊娠した時	した	75	49.3		50	40.7		
		しない	77	50.7		73	59.3		
	出産後	した	114	75.0		95	77.2		
		しない	38	25.0		28	22.8		
頻度		数えきれないほど	100	65.8		77	62.6		
		5回程度以上	37	24.3		39	31.7		
		1-2回程度	15	9.9		7	5.7		
納得		した	101	66.4		90	73.2		
		しない	3	2.0		0	0		
		どちらでもない	48	31.6		33	26.8		

話し合いを行わなかった理由は、時間がなかった、その必要がなかった、相手が面倒がる、キレるから、生まれてからでないとわからないから、などであった。

話し合いの内容では、経済的なこと、子どもの教育について、子どもへのかかわり方、妻の仕事、家族計画、家事育児の分担、子どもの健康・成長・性格、住む場所や住居について、困っていることなどであった。

(3) 互いの批判

子育てに関する批判	妻	夫
受け止め方	夫からの批判で感じた気持ち	妻からの批判で感じた気持ち
マイナスの受け止め	**夫に批判されて落ち込む** 悲しい全否定された気分、人格否定, 自信がなくなり消えてなくなりたい, ショック, 理不尽な気持ち, わかってもらえず辛かった, あきらめの気持ち, またか、気持ちが落ちた, 理解されないさみしさを感じる, 自分がただ振り回されている感じ, 開き直って忘れる、聞き流すようにする **夫から批判されて攻撃的な気分になる** ムカつく, 腹が立つ, 頭にくる, イライラする, そういうあなたはどうなの, 何もしないのに口出ししないで,	**妻に批判されて落ち込む** 残念, やる気を損なう, 子育てをやっていけるのか不安, 自分なりに頑張っているの, にしょうがないと感じた, 申し訳ない気持ち, 悲しい, そういわれてもうまくできない, 力不足を痛感させられた, 妻は頑張っていて、自分はダメな人間だ, 本当にすいません, 悪かったなと思う **妻から批判されて内心怒りを感じる** 不愉快に思う, そんなことはないだろう, 口出しするのをやめようと思う, ムカつく, 素直に受け止められず反発してしまう,

	ストレスだった, 怒りがこみ上げ泣けてきた, うるさい, 何もしていないのに批判するのはおかしい, わかっていないのはあなた心の中であきれる	小言が多く嫌だイラっとするが、その後冷静に考えようと問いかける, 腹が立つが我慢している批判ばかりだとやりたくなくなる
プラスの受け止め	**夫に批判され自らを振り返る** 不十分なところを自覚している, 自分のしていることを反省する, 直そうと思う, 足りないところに気づかされた, 一つの意見として参考にする, 後で振り返り相手の気持ちを知り受け止め改善した, その通りだと納得し直した **夫から批判されることに感謝している** サポートされている感じ, 自信がないからむしろ相談したい, ありがたい気持ち, 私と子どものことを思ってくれている	**妻から批判されても気にしない** わからないことに対して言われても何も感じない, いろんな意見があるんだと実感した, 父親としての考えでしているので参考程度, 妻はイライラしているので何を言ってもむり, 人には考え方がいろいろあると思う, そういう考えもある, あまり気にしない, どうでもいいじゃんと思う, 流す, 子どもに合うやり方は一つではない, 心のバランスのため深刻に受け止めないようにする **妻に批判され自らを振り返る** 納得して意識改革をした, 新たな気づきに通じる, 子どものため直さないといけないと思う, 妻が思っている以上に協力できていない, なるほどと思うところがある, 自分でも反省するところがある, 考えを受け入れ修正する, 仕事を休む時は休む, 納得できることであれば反省しなおす, 自分の子どもへの言葉遣いに気づく そのまま素直に受け止める, 一番子どもと接していて理解しているための判断 妻に従おうと思った, 納得いかない点もあるが、主に面倒を見ている妻なので仕方ない

(4)　批判の背景にあるもの

批判の背景にあるもの	妻	夫
主たる背景	妻が考える	夫が考える
互いの性格傾向による	**自分の性格がそうさせている** 感情的になりやすい, 自己中心的なところ, 独断的なところ, ぐちぐちと引きずってしまう, 先を見て行動する, 冷静さがない, 要領が悪い **夫の性格がそうさせている** タイプA(血液型 A)だから, 自己中心的, 視野が狭い, その場しのぎ, 感情的なところ, 客観的, 理論的なところ, 冷静さ, 先を見て行動する, 常に自分が正しいと考えている, 心配しすぎ	**自分の性格がそうさせている** 自分勝手なところがある, 自分の視野の狭さ, おおざっぱなところ **妻の性格がそうさせている** 何かした後にすぐかたづけないと気が済まない, 短絡的な考え方, 注意力が細かいところ, 否定的なことを発するのが好き、人を困らせたい完全主義なところ

	夫はその時の気持ちをぶつけているだけ 仕事が忙しい, イライラしている, やつあたりしている	**妻はその時の気持ちをぶつけているだけ** ホルモンバランスが悪い, 子育てのイライラがある, 予定通り物事が進まないストレスがある, リフレッシュが足りていない, オーバーワークで疲労状態, 子どもの行動への不満がある, ストレスのはけ口, 疲れているんだなと感じる, 八つ当たりしたいのだろうし、見守る
生育歴や育児観の違い	**夫は父親としての威厳を示したい** 自分はパパであることを見せたい, 父親の言うとおりにすることを示したい, 自分の方が力がある自分が一番偉い, 文句を言うなと考えている **夫には理想の子育てがある** 思い通りにやりたい, 手抜きしてほしくない, 理想の母親像がある, 子どもへの愛情, ネット情報に固執している, 一般的な子育て論で見ている, 子育ては妻の仕事と思っている, 社会的な立場からの発言が多い, 他と比較したいサポートしたいと思っている **育った環境が違う** 育ちが違う, 考え方が違うのは当たり前, 母子家庭で育ち、父親のとしての関りがわからない, 男女差やジェネレーションギャップもある	**育児観の違いがある** 考え方や方針が違う, 価値観が違う, 迷いながらも子どものためと思いやっている, 育児に対するスタンスの違い, 自分には育児に対する目標がない, 感覚や考え方の不一致がある **妻には子育てへの考えがある** 基本に忠実に考えろといった思いがある, 妻なりに信念があるのだと思う, 妻に強い偏った考えがある, 他者との比較子どもに対してよい親像がある本など勉強していると思うので任せる, 全ての基準に義父母にあるのが妻の考えにある, 全ては子どものためだと思う, 妻なりに正しいと判断する考えの根拠がある **育った環境が違う** その家によって違う、違う人間だから仕方ない妻の父と自分の落差考え方や方針が違う親からの教育の違い妻は厳しい家庭で育っている 怒られないで育っている生活環境の違い **育児のやり方が変わってきた** 時代の流れで育児のやり方が違う
家庭内の役割や関係性		**妻は育児・家事への自分に対する不満がある** 仕事の関係で出来れば妻に子育てをお願いしたい, どこかで自分ばっかりという考えがある, 一人目の時に育児不参加だったことが大きな背景である, 仕事が忙しく子育てに参加できない, 子どもに関わっていない気持ちがある, 子どものことをあまり聞かないから, ちゃんとできていないことが多い, 自分の考えを押し付けてしまった, 育児に対して相手の求める水準に満たない, こうあってほしい姿とのギャップがある, 家事育児に対する考えがまだ足りない, 育児の時間がなく任せっきりになっている, 自分の育児に対する未熟さがある, 仕事より子育てが大変と思っていて、どちらも大変と考える自分とのギャップがある, 子ども優先に時間を考えて行動していなかった,

		子どもと妻で決めていることがわかっていない, 子どもに対する対応に不満がある, やってほしい時にすぐ頼みを聞かないから
夫婦関係の歪み	**夫婦のコミュニケーションのずれ** 理解しようとしない, 馬鹿にしている, 協力がない相手を一人の人として認めていない, 夫は疎外感を感じている, 夫に相談しないところ, 愛情がなくなった, 本当に最低離婚を考えている, 根本的に合わない **夫には不満がある** 感謝の気持ちも伝えず夫も不満がたまっている, 家計管理や家事がおろそかになっている, 子どもの成長に不満がある, 自分を構ってくれない	**妻は夫である自分に不満がある** 会話がない, 妻は自分の考えを尊重していないと思っている, たぶん嫌いだから, 自分に対する不満がある, 家族に対する感謝の気持ちをもっと言葉にしてほしい, 妻の育児ストレスを自分が受け入れてやれていない, 仕事ばかりだから, 帰りが遅く家にいなさすぎ

5. 考察

（1）夫婦の子育てに関する話し合い

本結果では、8 割近くの夫婦は子育ての話し合いをしていた。話し合いをしなかった者の理由には、時間がなかった、その必要がなかった、相手が面倒がる、キレるから、生まれてからでないとわからないから、などであった。これらの理由から話し合わないケースでは、話し合いをすることが相手にとって面倒、きれるなどの状況にあり、協力して合意しながら子育てをしていくことが難しいケースと考えられる。子育ての話し合いは出産後が最も多く、現実的に話し合う必要に迫られている時期であると考えられた。その回数は数え切れないほど話し合っており、納得するまで話し合っているものが 6 割を超えていた。また、「その都度話をする」は「話をしたことがある」に比べ話し合いの位置づけがより身近なものとなっていると考えられる。以上のことから、子育ての話し合いは比較的良く行われており、その内容は様々である。納得するまで話し合う傾向がある中で、話し合いでは理想的な解決法が共有されることが多いと考えられ、日々の生活においては、現実に遭遇していない段階でのあるべき理想の話では、実行が難しくなる場合があると考えられ、その時々の対応が求められると考える。

（2）妻と夫の育児への互いの批判の受け止め

妻と夫の互いの批判の受け止めで共通している点は、マイナスの受け止めとして批判されて落ち込むこと、さらに感情的、攻撃的になり、内心怒りを感じていた。落ち込む点、悲しい、やる気がなくなる、申し訳ないなどの気持ちであるが、妻はさらに全否定・人格否定されたと感じており、ショックや消えてなくなりたいなどの気持ちを抱いていた。子育ては母親の役割として大きいことを実感しているからこそ、妻の落ち込みは深いと考えられると共に、女性特有の感覚的な受け止め方（田中，1998）が示されており、記述の内容からもそうした受け止め方が反映されていると推察された。夫と違い、妻は特に攻撃的な気分になり態度や言葉に現れるが、夫は妻に比べると冷静な部分や我慢の心などがみられ、客観的な見方があると考えられる。プラスの受け止めで共通している点は、批判されたことに対して自らの言動を見直していた。また、夫の特徴では、気にしないという受け止めがあり、本研究では妻から批判されても関係ないと解釈したが、状況によってはマイナスにもつながり得ると考えられる。ある意味何を言われても動じない、聞き流す、参考程度にしかならない、やり方はいろいろあるから、など冷めた受け止めとも考えられる。また、妻の意見を尊重するしかないと考え、子育てを主としてやっている妻を尊敬している姿があった。また、一部の妻の中には、批判されたことに感謝の念を抱いているも

のもあった。その根底には、自分の足りなさを自覚し、夫への信頼の心を持ってサポートされていると感じていた。必ずしもマイナスの側面ばかりではないこともわかった。批判をどのように受け止めるのかは、背景にあることをどのように考えているのかにも関連していると考えるが、妻のマイナスの受け止めは、子育てを中心になってやっているからこそ熱くなりやすく、受けるダメージも大きいと考えられた。

6. 結論

夫婦の育児への批判をめぐって、その違いや特徴が明らかになった。夫婦の認識や受け止めのずれが大きくなる前に、お互いの思いを伝達することや、親役割観の見直し、育児観の尊重、不満な思いを伝え話し合うことが大切になることが示唆された

引用文献

青木聡子(2009).北米における離婚経験のない夫婦のコペアレンティング研究の現状と課題ー我が国の今後の育児研究に向けて(fulltext).学校教育学研究論集,20,p17-27.

渥見由喜(2010).夫婦の愛情曲線の変遷,日本経済新聞出版社.

ベネッセ次世代育成研究所(2011).第１回妊娠出産子育て基本調査フォローアップ調査(妊娠前から 2 歳児期),pp.1-19,64-68.

Cowan,P.A.&Cowan,C.P.& What an intervention design reveals about how perents affect their children´s academic achievement and behavior problems.In brokowski, J.G.,Ramey,S.L.&Bristol-Power,M. (Eds.)(2002). Parenting and the child´s world : influences on academic, intellectual, and social-emotional development. London:Lawrence Lawrence Erlbaunm Associates., p.75-97.

五百田達成(2015).察しない男説明しない女　男に通じる話し方女に伝わる話し方.ディスカヴァー・トュエンティーワン,pp.20-46, 東京, ディスカバー.

Belesky,J.,Kelly,J.(1995) . The Transition to Parenthood 子供を持つと夫婦に何が起こるか　安次嶺佳子訳　草思社, pp.34-60, 133-167, 東京,草思社.

柏木恵子,平山順子(2003).結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性－妻はなぜ不満か－心理学研究,74(1),p.122－130.

片岡優華(2015).妊娠期から育児期における夫婦の葛藤と意思決定に関する文献レビュー.創価大学紀要,1, p.3-13.

加藤道代(1999). 育児初期の母親の養育意識・行動とサポート資源.国立婦人教育会館研究紀要,3,p.53-59.

加藤道代,黒澤泰,神谷哲司(2014a).夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討.心理学研究, 84(6), p.566－575.

加藤道代,黒澤泰,神谷哲司(2014b).コペアレンティングー子育て研究におけるもう一つの枠組み.東北大学院教育学研究科研究年報, 63(1), p.83-102.

狩野真理(2013).性役割観と夫婦関係満足度に関する質的研究.竜谷大学大学院文学研究科紀要,35,p.1-16.

Lazarus R, Folkman S,(1991)/本明寛他監訳. ストレスの心理学, pp.269－277, 実務教育出版,東京.

McBride,B.A.,Brown,G.L.,Bost,K.K.,etal.(2005).Parentalidentity,maternal gatekeeping, and father involvement. Family Relations,,54,3,p.60-272.

中川まり(2009).共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加.人間文化創成科学論叢,12,p.305－313.

中島久美子,常盤洋子(2008).妊娠期の妻への夫の関りと夫婦関係に関する研究の現状と課題.群馬保健学紀要,29,p.111-119.

小野寺敦子(2005). 親になることにともなう夫婦関係の変化.発達心理学研究,　16(1),p.15-25.

Polit,D.F.,Beck,C.T.(2010).看護研究　原理と方法第 2 版,pp.265-269.

桜井茂男,大谷佳子(1997).“自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係.心理学研究,68(3),p.179-186.

佐々木裕子,関健介,高橋真理 (2019).妊娠期からのペアレンティングプログラム「赤ちゃんの根貸付準備講座」web 教材の開発.杏林医会誌,49(3), p.205-216.

佐藤奈保 (2008).乳幼児期の障害児をもつ両親の育児における協働感と相互協力の関連,千葉看会誌,14(2),p.46-53.

清水嘉子 (2003a).母親の育児ストレスと夫の家事育児協力.子どもの虐待とネグレクト,5(2), p.396-406.

清水嘉子 (2003b).育児ストレスの実態研究-ストレス情動反応を中心にして一.母性衛生,44(4), p.372-378.

清水嘉子 (2006a).父親の育児ストレスの実態に関する研究.小児保健研究, 65 (1) ,p.26-34.

清水嘉子, 伊勢カンナ(2006b).母親の育児幸福感と育児事情の実態　母性衛生, 47(2),p.344-351.

清水嘉子 (2008).父親の育児幸福感－育児に対する信念との関係－.母性衛生, 48(4),p.559-567.

清水嘉子(2017).乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究.日本助産学会誌,31(2),p.120-129.

清水嘉子,関水しのぶ, 遠藤俊子(2010a).母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発, 日本助産学会誌,24(2),p.261-270.

清水嘉子(2010b). 母親の育児ストレス尺度―短縮版作成と妥当性の検討―. 子どもの虐待とネグレクト,12(2),261-270.

田中慶子(2014).夫の家事・育児と妻の夫婦関係評価,季刊家計経済研究,(104), p.23-33.

田中冨久子(1998).女の脳・男の脳.pp39-116, 東京, NHK ブックス 10348.

矢倉紀子,原口由紀子(2002).父親の子育て参加の実態とその関連要因―K町の母子保健協会のアンケート調

査から―.家族看護研究,7(2),p.145-151.
涌水理恵(2016). ペアレンティングプログラムが発達障がい外来に通院中の児・親・家族に与えた効果についての定量的/定性的考察,家族看護学研究,21(2).p.158-170.
Van Egeren,L.A.(2003).Prebirth predictors of coparenting experiences in early infancy. Infant Mental Health Journal.24(3),p.278-295.

清水嘉子（2020）.育児期にある夫婦ペアレンティング-互の育児の批判をめぐって-.日本助産学会誌, VOL34 No1, 103-113.
10.3418/jjam.JJAM-2019-0009　一部加筆

【研究１－3】

研究課題

育児期にある夫婦ペアレンティング

－母親の促進行動と批判行動への影響要因－

1. 緒言

夫婦はどのように“二人で協力して子育てを行うのか”、夫婦ペアレンティングに関して、近年の米国では、二人親家庭におけるコペアレンティング研究として急速に発展を見せている。

研究者による母親の心身の縦断研究[1)]では、育児において父親の存在は大きいことが明らかになっている。また、子育てには父親が欠かせないと考えられているが、実際我が国における子育て研究の子どもに対する父親への実際的な関わりの協働やその調整について検討されていない[2)3)]。

そこで、研究者は夫婦ペアレンティングについて研究をスタートさせ、夫婦ペアレンティングの促進行動と批判行動のパターンの実態から、夫婦ペアレンティング調整の「促進行動が高く（いつもある）批判行動が低い（少ない）」パターンが、夫婦共に心理的に良い状態を示していることを明らかにした。それは、育児幸福感が高く、育児ストレスが低い。さらに納得する話し合いがされており、「夫への理解・支援」、「妻への理解・支援」、「相思相愛」が高い、互いに思いやりの気持ちがあることがわかった[4)]。

子育て期にある夫婦の協力についての研究では、妻による夫関与への抑制要因、すなわち子どもを任せられない状態（gatekeeping）だけではなく、促進要因の存在が指摘されている[2)]。また、母親の育児への自信が、子どもの成長とともに減少し、夫へ相談しないほど自信がないこと[5)]が明らかとなっている。そこで、本研究では、3 歳以降 4 歳までの子どもをもつ子育てをしている母親の夫婦のペアレンティングにおける、促進行動と批判行動に着目し、母親による父親に対する育児の促進は、父親の育児関与を高め、それにより母親は父親の促進をさらに高め批判が低減する母親の促進行動、批判行動に影響する要因を探るため、先行研究[4)]による母親のデータの再度分析を行ない、新たな知見を得られたため報告する。

促進行動と批判行動に影響する要因を明らかにすることは、先行研究に加え、具体的な行動に対する支援を検討する上で重要な視点であると考える。本研究が夫婦をペアとしてとらえ夫婦の子育てにおける夫婦間調整、すなわち望ましい育児環境を整えていくことの一助となると考える。夫婦ペアレンティングの調整により良好な子育てが行われることは、育児を次の親世代に引き継ぐことに通じるものと考える。

2. 研究目的

母親自身が捉えた母親の夫婦ペアレンティングである促進行動と批判行動に影響する要因を明らかにする。

3. 研究方法

(1)調査対象

3 歳から 4 歳の子どもをもつ母親、600 人に調査用紙を配布した。

(2)調査期間

調査期間は 2018 年 10 月から 2018 年 12 月であった。

(3)依頼方法

X 県に位置する幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力のお願い文と共に質問紙を同封し直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。母への質問紙の依頼文には、回答後自身の質問紙を別の封筒に入れて封をして園または、センターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収箱に入れ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合は、研究への同意が得られたものとした。

(4)研究デザイン

尺度を用いた選択的回答並びに記述式質問項目による自記式質問紙調査による研究

(5)調査内容

選択的回答

- ✧ 清水らによる尺度（育児幸福感尺度短縮版[15)]、育児ストレス尺度短縮版[16)]）

  子育てをしていて感じる幸せな気持ちについて
  - ・子どもとの絆
  - ・育児の喜び
  - ・夫への感謝

  子育てをしていてつらいと感じることについて
  - ・心身的疲労
  - ・育児不安
  - ・夫の支援のなさ

- ✧ 子どもが生まれる前に親としての実感の有無
- ✧ 出産後の生活のイメージの有無
- ✧ 里帰り出産により夫婦別生活の有無

- ✧ 母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動について夫婦ペアレンティング調整尺度[12)]
  - ・促進行動

・批判行動

✧ 自分の性格について自己志向的完全主義尺度[17]

・高い目標

・完全でありたい

・ミスを気にする

・自分の行動に漠然とした疑いをもつ

✧ ジェンダーに関する影響が示唆されていることから[11]

結婚の現実尺度[18]の認識について

・相思相愛

・夫への理解・支援

・妻への理解・支援

✧ 夫婦の話し合いが関係していることから[17]

子どもが生まれてからの生活についての話し合い

・話し合いの有無

・話し合いの時期

・話し合いの頻度

・話し合いの内容に納得したか

自由記述式回答

✧ 育児行動を批判されたときどのように感じ受け止めたか

✧ 批判的な行動の背景にあるものについての考え

✧ 結婚後相手の生活態度に変化について　感想も含む

✧ 年齢

✧ 子どもの人数

✧ 子の年齢

✧ 同居家族

✧ 就労形態

(6)研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、回収した後は番号化して処理し、入力したデータを研究結果公表後破棄することを明記した。倫理審査は名古屋学芸大学倫理委員会の審査を受け 2017 年に承認(#274)を得た後に研究を開始した。

4. 結果

(1)対象者の属性と子育て状況

調査用紙の回収は 294 人(49.0%)、その内有効回収は 291 人(48.5%)であった。結果を表 1 に示す。

核家族が 9 割以上、就業状況は、専業主婦 51.9%、パートタイム 33.7%、フルタイム 3.8%であった。

出産前に親としての実感をもっていた母親は 31.3%、産後の生活イメージとのギャップを感じていた母親は 80.4%いた。また、子どもが生まれてからの生活についての話し合いの状況では、話し合いは 81%が行っていた。

表1 母親の夫婦ペアレンティング調整尺度得点と属性の比較　N=291

		促進						批判					
		Mann-Whitney U	低群	高群				Mann-Whitney U	低群	高群			
	N	p	N	N	χ^2	p		p	N	N	χ^2	p	
母親としての実感は子どもを産む前からあった													
いいえ	200	.13	108	92	1.54	.21		.55	91	109	0.64	.42	
はい	91		42	49					46	45			
出産後の生活のイメージは実際と変わらない													
いいえ	234	.13 *	125	109	1.68	.20		.48	107	127	0.88	.35	
はい	57		25	32					30	27			
里帰り出産により夫と別生活がしばらくあった													
いいえ	125	.13	66	59	0.14	.71		.73	58	67	0.04	.84	
はい	166		84	82					79	87			
子どもが生まれてからの生活について夫と話し合った													
いいえ	55	.00 *	43	12	19.3	.00 *		.20	31	24	2.35	.13	
はい	236		107	129					106	130			
話し合いに納得													
していない	84	.00 *	52	32	14.4	.00 *		.00 *	26	58	10.3	.00 *	
した	152		55	97					80	72			
話し合いの頻度													
数えきれる程度	87	.00 *	48	39	5.38	.02 *		.90	39	48	0.00	.98	
数え切れない程	149		59	90					67	82			
末子年齢													
２歳以下	101	.05 *	45	56	3.03	.09		.90	49	52	0.13	.81	
３歳以上	190		105	85					88	102			
仕事をしている													
いいえ	159	.09	80	79	0.21	.64		.70	76	83	0.07	.79	
はい	132		70	62					61	71			
子ども数													
1人	54	.97	27	27	0.63	.88		.99	25	29	0.16	1.00	
複数(2人以上)	237		120	114					112	125			

*: χ^2(両側検定)

Mann-Whitney U test

連関性を見るためにχ^2検定を行った。

母親を対象に夫婦ペアレンティング調整の意識調査の回答結果、母親の促進行動得点、批判行動得点をそれぞれ中心傾向中央値からパーセンタイル値等サイズ 2 グループに算出し得点を高群と低群の 2 群に分けた。この 2 群の比率に有意差が認められたものは、促進は「子どもが生まれてからの生活について夫と話し合い」、「話し合いに納得」「話し合いの頻度」、批判は「話し合いに納得」であった。

(2)「育児ストレス」「育児幸福感」「自己志向的完全主義」「結婚の“現実”」の促進行動と批判行動の高低群比較

促進得点は低群～29 以下、高群 30 以上～、批判得点は低群～16 以下、高群 17 以上～とした。母親の下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度高低群間の比較は表 2 に示す。

表2 下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度得点2群間との比較　N=291

夫婦ペアレンティング調整尺度 高低2群	項目の数	α係数	促進行動 高群 N=141 MEDIA N	Mean±SD	低群 N=150 MEDIA N	Mean±SD	p
促進得点	9	0.88	37.0	37.60 ± 6.22	23.0	22.71 ± 4.72	
批判得点	7	0.86	17.0	17.62 ± 5.91	18.0	18.72 ± 7.14	
育児幸福感							
子どもとの絆	4	0.73	18.0	16.93 ± 2.93	17.0	16.22 ± 3.10	.00 *
育児の喜び	5	0.84	25.0	23.30 ± 3.06	24.0	22.97 ± 2.44	.02 *
夫への感謝	4	0.78	19.0	18.28 ± 2.12	16.0	15.47 ± 3.40	.00 *
育児ストレス							
心身的疲労	6	0.84	16.0	15.81 ± 5.19	17.0	16.45 ± 5.97	.36
育児不安	6	0.83	11.0	12.21 ± 5.14	15.0	14.25 ± 5.25	.00 *
夫の支援のなさ	4	0.87	7.0	7.63 ± 3.46	12.0	11.71 ± 4.58	.00 *
自己志向的完全主義							
高い目標	5	0.81	17.0	16.34 ± 5.05	15.5	15.43 ± 4.94	.14
完全でありたいという欲求	5	0.88	16.0	16.26 ± 5.81	15.0	15.33 ± 5.20	.14
ミスを気にする	5	0.79	13.0	13.29 ± 5.23	13.0	13.60 ± 4.40	.43
自分の行動に漠然とした疑いを持つ	5	0.79	18.0	17.61 ± 5.44	17.0	17.42 ± 5.35	.66
結婚の"現実"							
相思相愛	4	0.89	16.0	16.25 ± 2.64	16.0	14.43 ± 3.32	.00 *
夫への理解・支援	4	0.68	15.0	14.95 ± 2.46	14.0	13.59 ± 2.76	.00 *
妻への理解・支援	4	0.69	14.0	14.38 ± 2.51	13.0	13.06 ± 2.96	.00 *

夫婦ペアレンティング調整尺度 高低2群	項目の数	α係数	批判行動 高群 N=154 MEDIA N	Mean±SD	低群 N=137 MEDIA N	Mean±SD	p
促進得点	9	0.88	28.5	28.79 ± 8.50	30.0	31.20 ± 9.91	
批判得点	7	0.86	22.0	22.99 ± 5.26	13.0	12.79 ± 2.41	
育児幸福感							
子どもとの絆	4	0.73	17.00	16.33 ± 3.15	18.00	16.82 ± 2.88	.16
育児の喜び	5	0.84	24.00	23.13 ± 2.86	24.00	23.13 ± 2.65	.69
夫への感謝	4	0.78	17.00	16.18 ± 3.34	18.00	17.57 ± 2.80	.00 *
育児ストレス							
心身的疲労	6	0.84	16.00	15.93 ± 5.93	16.00	16.37 ± 5.24	.49
育児不安	6	0.83	14.00	14.06 ± 5.53	12.00	12.37 ± 4.87	.01 *
夫の支援のなさ	4	0.87	11.00	10.63 ± 4.71	8.00	8.72 ± 4.16	.00 *
自己志向的完全主義							
高い目標	5	0.81	16.00	16.20 ± 4.90	16.00	15.50 ± 5.12	.32
完全でありたいという欲求	5	0.88	16.00	16.45 ± 5.18	15.00	15.03 ± 5.80	.03 *
ミスを気にする	5	0.79	13.00	13.81 ± 4.59	13.00	13.05 ± 5.04	.16
自分の行動に漠然とした疑いを持つ	5	0.79	18.00	17.82 ± 5.22	17.00	17.17 ± 5.57	.33
結婚の"現実"							
相思相愛	4	0.89	16.00	14.64 ± 3.30	16.00	16.07 ± 2.78	0.00 *
夫への理解・支援	4	0.68	14.00	13.66 ± 2.70	15.00	14.92 ± 2.55	0.00 *
妻への理解・支援	4	0.69	14.00	13.49 ± 2.85	14.00	13.93 ± 2.79	0.21

*:p<0.05 Mann-Whitney U test

下位尺度得点と夫婦ペアレンティング調整尺度得点高低 2 群間との比較において、有意な差が見られた項目は、促進行動では育児幸福感の「子どもとの絆」「育児の喜び」「夫への感謝」、結婚の現実の「相思相愛」「夫への理解・支援」「妻への理解・支援」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」で、育児幸福感、結婚の現実は高群の得点が高く、育児ストレスは高群の得点が低い。

批判行動は育児幸福感の「夫への感謝」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」、自己志向的完全主義の「完全でありたいという欲求」、結婚の現実の「相思相愛」「夫への理解・支援」であった。育児幸福感と結婚の現実は低群の得点が高く、育児ストレスと自己志向的完全主義は高群の得点が高い。

(3)夫婦ペアレンティングにおける母親の促進行動と批判行動の影響要因

促進行動：高い＝１低い＝0、　批判行動：高い＝1　低い＝0　を 2 値とした目的変数で、それぞれロジステック回帰分析を行った。夫婦ペアレンティング尺度による促進行動と批判行動に影響していた要因を表３に示す。

モデル係数のオムニバス検定有意確率は促進行動・批判行動とも.01％未満でモデル式の有意性が保証された。Hosmer と Lemeshow の検定結果の有意確率は促進行動が.517、批判行動は.262、共に.05 以上なので求めたモデルがデータに適合していることを確認した。

表3 二項ロジステック回帰分析結果 促進行動、批判行動に影響する要因　N=291

影響要因	オッズ比	95% 信頼区間 下限	上限	p
促進行動				
夫への感謝	1.31	1.13	1.51	.00
夫の支援のなさ	0.86	0.80	0.93	.00
話し合い(有)	2.77	1.26	6.08	.01
批判行動				
夫への感謝	0.90	0.83	0.99	.02
完全でありたい欲求	1.07	1.02	1.12	.00
夫への理解・支援	0.84	0.76	0.93	.00

ｐ値有意差 5%未満から促進行動は「夫への感謝」、「夫の支援のなさ」、「話し合いが有る」、批判行動は「夫への感謝」、「完全にありたい欲求」、「夫への感謝・支援」が影響を与えていることがわかった。

オッズ比の値から各変数が 1 増加した時に、「促進行動または、批判行動が高くなりやすくなるか」がわかる。

促進行動「夫への感謝」1．31 倍、「話し合いが有る」2．77 倍となり、「夫の支援のなさ」は 0．86 倍で減少する。「夫の支援のなさ」は促進行動を高くする関連性は低い。

批判行動は「完全でありたい欲求」が 1．07 倍となるが、「夫への感謝」は 0．90 倍、「夫への理解・支援」は 0．84 倍で減少させる。

このモデル（回帰式）に基づいて促進行動または、批判行動が高くなるか、ならないかを予測した結果、全体で正しく予測したのは（正答率）促進行動は 75．4%、批判行動は 65．6%であった。

有意となった下位項目及び構成されている質問項目、平均値等について表4に示した。

表4 二項ロジステック回帰分析結果 影響要因の現状 N=291

説明変数	目的変数											
	促進行動											
	低群=0						高群=1					
夫への感謝	MIN	MEDIAN	MAX	Mean		SD	MIN	MEDIAN	MAX	Mean		SD
夫が育児に協力してくれることに感謝するとともに安心だ	1	4	5	4.1	±	1.1	2	5	5	4.8	±	0.5
夫が疲れて帰ってきても子どもの様子を尋ねたり話しに耳を傾けてくれることに感謝している	1	4	5	3.5	±	1.4	1	5	5	4.5	±	0.8
夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる	1	3	5	3.2	±	1.1	1	4	5	4.1	±	1.0
夫も見て喜ぶ子ども子どもを見て笑顔になる家族を見て幸せを感じる												
夫の支援のなさ												
夫は子育てに協力的でない	1	3	5	2.7	±	1.3	1	1	5	1.7	±	1.0
子どもより自分の生活を中心に考えている	1	4	5	3.2	±	1.4	1	2	5	2.2	±	1.2
妻の育児生活の苦労を理解していない	1	3	5	3.1	±	1.3	1	2	5	2.0	±	1.2
夫の子育ては不完全で迷惑	1	3	5	2.7	±	1.4	1	2	4	1.8	±	0.9
話し合い 無=0 有=1	12	24	29	23.5		4.1	30	37	54	37.7		6.2

	批判行動											
	低群=0						高群=1					
夫への感謝	MIN	MEDIAN	MAX	Mean		SD	MIN	MEDIAN	MAX	Mean		SD
夫が育児に協力してくれることに感謝すると共に安心だ	1	5	5	4.6	±	0.8	1	5	5	4.3	±	1.0
夫が疲れて帰ってきても子どもの様子を尋ねたり話しに耳を傾けてくれることに感謝している	1	5	5	4.3	±	1.0	1	4	5	3.7	±	1.4
夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる	1	4	5	3.9	±	1.1	1	3	5	3.4	±	1.1
夫も見て喜ぶ子ども子どもを見て笑顔になる家族を見て幸せを感じる												
完全でありたい欲求												
どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである	1	2	6	2.6	±	1.4	1	3	6	3.0	±	1.3
物事は常にうまく出来ていないと気が済まない	1	3	6	2.9	±	1.4	1	3	6	3.3	±	1.3
中途半端な出来では我慢できない	1	3	6	3.1	±	1.3	1	3	6	3.4	±	1.2
できる限り完璧であろうと努力する	1	4	6	3.4	±	1.4	1	4	6	3.8	±	1.2
やるべきことは完璧にやらなければならない												
夫への理解・支援												
妻が夫の才能・能力を高めそれを伸ばす手助けをする	1	4	5	3.9	±	0.8	1	4	5	3.5	±	0.9
妻が夫の仕事・活動を理解し支える	2	4	5	4.1	±	0.7	2	4	5	4.0	±	0.7
妻が夫を立てる	1	4	5	3.7	±	0.9	1	3	5	3.2	±	1.0

※記述統計量記載無しの項目は影響の関連性が見られなかった

5. 考察

本研究結果において、対象である母親は専業主婦が 52%を占めていた。夫と妻が遂行する育児の総量を 100 としたとき、それぞれが分担する割合について、妻と夫の育児分担割合は妻が 8 割前後、夫が 2 割前後でほぼ横ばいで推移しており、妻の分担割合が夫を圧倒的に上回っている。そして妻が専業主婦の場合、妻の育児分担割合が 9 割以上の割合は 56%と最も高くなる [17]。専業主婦の育児負担が高いことが夫婦ペアレンティングにおいて、促進行動や批判行動に影響を及ぼすのか分析したが有意な差はなかった。

子どもが大きくなるにつれて夫の協力が低くなってくることから [1]、促進行動を増やそうとする行動につながるものと考えられる。

母親の属性要因との検討において、その多くが促進行動に関連があることが分かった。つまり、促進行動を促す支援が有効と推察される。促進行動には、夫との話し合いがあること、納得していること、数え切れないほどの話し合いをしていること、が有意な結果から、話し合いを行うこと、話し合いを多く行うこと、話し合いで納得することが大切になると考えられる。夫婦関係構築のために、妊娠期から育児期においてどのような子育てをしたいのか、育児中の生活スタイルなど夫婦で折り合いをつける育児プランを作成し話し合いを行っていくことで、お互いの価値観を知ることの重要性が示されている [18]。特に、話し合いで納得することは、促進行動を高めるばかりか、批判行動も高めることに有意となっている。納得の属性、先行要件、帰結 [19]の結果によると、納得とは「ある事象に対して自分のもつ価値や自分への利益を明確にすることで理解を深め、認知的にも感情的にも受容された状態であり、主観的かつ他者との信頼関係の中で生みだされる流動的な状態」とされている [20]。納得することは、人の考えや行動などを十分に理解して心得ることを意味し、他人の意見や他の物事を受け入れることになる。そのことが、母親が父親への促進行動を促すと考えられる。

しかし、話し合いに納得することにより促進行動が高いにもかかわらず批判行動も高くなることがある。それは、自身の性格として、夫が協力してくれても自分の思ったとおりになっていなければ攻撃するか、あきれてしまい何も言わない。完璧志向が子育てに影響していること、母親の完璧でないと気が済まないのにそれが育児に反映されていないことが考えられる。今回、批判行動を増加させる要因に、自己志向的完全主義「完全でありたいという欲求」が分析からも明らかになった。

母親の促進行動は「夫への感謝」、「夫の支援のなさ」、「話し合いが有る」、批判行動は「夫への感謝」、「完全にありたい欲求」、「夫への感謝・支援」が影響要因とわかった。先行研究 [4]でも夫婦の心理状態が良好であれば、促進行動がよく見られていることが示唆されている。

結婚の“現実”対する満足度は、育児能力に影響し、結婚の満足度の高いカップルは、互いに心が乱され他に心をとらわれることがないから、子どもの合図や信号にすぐ気が付くことができる。その上、自分個人のやり方にとらわれずに喜んで子どもに協働作業のペースを決めさせることができる [21]。それは、子どもにとって大切なこと、安定して子育てができることに通じるものと考えられる。

本研究において、「夫への感謝」「夫の支援のなさ」「話し合い(有)」「完全でありたいという欲求」は、母親の夫婦の相互の関係への影響について知ることができると考えられる。夫婦が互いに相手を尊重しサポートしようとする姿勢が重要だといわれている[22]ことからも本結果を裏づけているといえる。

特に"完全でありたいという欲求"は、夫婦ペアレンティングを阻害する要因として働き、夫婦の愛情にも関係すると考えられた。母親の育児困難感と完全主義との関連性は明らかにされており[25]、完全主義傾向を軽減できるエンパワーされた関係の支援の必要性が指摘されている。本研究では批判行動を高める夫婦ペアレンティングであったが、安心できる人達との関わりによって、夫婦ペアレンティングへの意味のある影響が期待される。なお、本研究は横断研究であり現時点の夫婦ペアレンティングを明らかにするものである。今後、縦断研究を行い、育児期における夫婦ペアレンティングの変化に着目した研究を行うことが課題である。

6. 結論

夫婦をペアとしてとらえ夫婦の子育てにおける夫婦間調整をうまく機能させるためには、母親が夫婦の関係に満足でき、話し合いに納得できることが大切になる。それらの積み重ねにより、夫婦の愛情が継続することに着目した夫婦への支援が示唆された。

本研究の限界は、コホート研究によるものではないこと、また地域に限定された調査であることから偏りがあることが考えられる。

引用文献

1)清水嘉子. 乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究. 日本助産学会誌. 2017, 31(2),120-129.

2)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題ー夫婦ペアレンティングの理解のために. 東北大学院教育学研究科研究年報.2012, 61(1), 9-126.

3)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. コペアレンティングー子育て研究におけるもう一つの枠組み.東北大学院教育学研究科研究年報. 2014,63(1), 83-102.

4)清水嘉子.子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因.母性衛生. 2020 , 61(2),340-351.

5)Mchale,J.P. Overt and covert coparenting processes in the family.Family process. 1997, 36, 183-201.

6)桜井茂男,大谷佳子. "自己に求める完全主義"と抑うつ傾向および絶望感との関係.心理学研究.1997,68(3),179-186.

7)清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子. 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発.日本助産学会誌.2010, 24(2), 261-270.

8)清水嘉子. 母親の育児ストレス尺度―短縮版作成と妥当性の検討―.子どもの虐待とネグレクト.2010 ,12(2), 261-270.

9)柏木恵子, 平山順子. 結婚の"現実"と夫婦関係満足度との関連性ー妻はなぜ不満かー.心理学研究.2003, 74(1), 122ー130.

10)加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討.心理学研究. 2014 , 84(6), 566ー575.

11)Cowan, P.A. ,Cowan, C.P. What an intervention design reveals about how parents affect their children's academic achievement and behavior problems. In Brokowski, J. G., Ramey, S. L.,Bristol-Power, M. (Eds.) Parenting and the child's world:Influences on academic,intellectual,and social-emotional development. London: Lawrence Erlbaum Associates. 2002, 75-97.

12)清水嘉子.育児期にある夫婦ペアレンティング-互いの育児の批判をめぐって-.日本助産学会誌.2020, 34(1),103-113.

13)清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子,他. 母親の育児幸福感―尺度の開発と妥当性の検討―.日本看護科学学会. 2007, 27(2), 15-24.

14)清水嘉子. 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究.ストレス科学. 2001, 16(3), 176-186.

15)Van Egeren LA.The Parental Regulation Inventory. Michigan State University.East Lansing Unpublished manuscript. 2000.

16)三重野洋子,濱口佳和.乳幼児を持つ母親における子育て完全主義傾向と育児ストレスの関連.筑波大学心理学研. 2005, 29,109ー116.

17)国立社会保障・人口問題研究所(編).2018 年第 6 回全国家庭動向調査.2019. < http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/NSFJ6_gaiyo.pdf > (アクセス 2021 年 3 月 18 日)

18)片岡優華.妊娠期から育児期における夫婦の葛藤と意思決定に関する文献レビュー.創価大学看護学部紀要.2015, 1, 3-13.

19)Rodgers,B.L.Concepts and the deveropment of nursing knowledge the evolutionary cycle. Adv Nurs. 1989, 14(4),330-335.

20)今井芳江,尾西智恵美,坂東孝枝.納得の概念分析―国内文献レビュー―.日本看護研究学会誌.2016,39(2),73-85.

21)Belesky,J., kelly, J. The Transition to Parenthood 子供を持つと夫婦に何が起こるか.安次嶺佳子訳 .東京, 草思社, 1995, 10-60, 133-167.

22)Van Egeren,L.A.The developpent of the coparenting relationship over the transition to parenthood.Infant Mental Hearth Journal. 2004, 25,453-477.
23)Schoppe-Sullivan,S.J.,Mangelsdorf,S.C.,Brown,G.L.,at al.Goodness offit in family context:Infant temperament,marital quality and early coparenting behavior.Infant Behav Dev. 2007,30,82-96.
24)Belsky,J.,Hsieh,K.H.,Crnic,k.Mothering,fathering,and infant negativity as antecedents of boys' externalizing problems and inhibition at age 3years:differential susceptibility to rearing experience？Development and Psychopathology. 1998,10,301-319.
25)後藤亜紀, 西村真実子.母親の完全主義と育児困難・エンパワーされた経験の関係.石川看護雑誌.2020, 17, 23-36.

清水嘉子.育児期にある夫婦ペアレンティング-母親の促進行動と批判行動への影響要因-.母性衛生.採択　2022. 63(1)掲載予定　一部加筆

【研究2】

研究課題

育児期にある夫婦関係の自覚と夫婦ペアレンティングへの思い

1.緒言

我が国は晩婚化と非婚化が進み、結婚後５年以内の離婚率が高いと報告されている（厚生労働省，2016)。夫婦ペアレンティングは、両親が親としての役割をどのように一緒に行うかということ（Feinberg M.，2003)とされ、広義では､｢その子どもの世話と養育に責任を負うべき複数の養育者が共有する行為｣(McHale ＪP.，1998）とされている。出産後の夫婦関係では、夫婦の関係が悪化したケースは50%、変化のなかったケースは 30%、向上したケースは 20%となり､配偶者への愛情は半分のケースが３０%減少し、心理的な葛藤や摩擦が増えている。加えて、夫婦のコミュニケーションも減少している（Belesky，J.，et al，1995)。同様に、夫婦の向き合いが出産後減少し、母子の向き合いが有意に増加していた（佐々木他，2007)。育児期をより良い体験にするために、結婚、妊娠、出産、育児に向き合うカップルに、夫婦ペアレンティングを実践するための留意点など有意義な示唆を示すことができると考える。

母親の心身の縦断研究（清水，2017）では、母親の育児の自信には父親に相談できることが影響していた。どのように夫婦として共に子育てにあたっているのかという夫婦ペアレンティングの調整の実態とそのプロセスの解明の取り組みは少ない中で（加藤他，2012/加藤他，2014)、子育てを良好な夫婦ペアレンティングの調整の中で行うことは、育児を次の親世代に引き継ぐことができると考える。妻と夫がお互いの子育ての批判をどのように受け止め、その背景に何があると考えているか、アンケート調査の記述から分析した結果、妻は批判されたことに対する受け止めはネガティブなものが見られ、夫婦関係の歪みとして認識していた。一方、夫の受け止めは客観的で、それはそれとして聞いているものの､自分の考えで行っているところがあり、妻は夫である自分や、育児・家事に対する不満があると受け止めており、妻と夫の夫婦ペアレンティングの違いが明らかになった（清水，2020a)。さらに、夫が子育てにかかわることに対して妻が尊重、支持、激励する行動を促進行動、夫が子どもに関わることに対して妻が拒否、避難、批判する行動を批判行動とした夫婦ペアレンティングの相様関連要因を明らかにした促進行動夫婦のペアレンティング調整は４パターン、ほぼ同じ割合にみられ、特に促進高-批判低パターンの妻が、心理的に良い状態を示していることが明らかになった。このパターンでは夫への感謝が高く、夫の支援のなさが低かった。さらに、育児不安が低く、話し合いをよく行い､話し合いに対して納得していた(清水，2020b)。

子育て期にある夫婦ペアレンティングの研究では、母親による父親関与への抑制要因、すなわち父親に子どもを任せられない状態（gatekeeping）だけではなく、促進要因の存在が指摘されている（加藤他，2012)。妻の促進行動や批判行動の背景にある思いやその思いに関係していると考えられる夫婦関係の自覚を明らかにするために、ここまでの子育てに夫婦がどう過ごしてきたのか、夫婦関係の自覚や夫婦ペアレンティングへの思いに着目し、聞き取り調査を行った。

2.研究目的

育児期にある夫婦関係の自覚と実際的なかかわりの協働やその調整である夫婦ペアレンティングへの思いを明らかにする。妻の促進行動や批判行動の背景にある思いやその思いに関係していると考えられる夫婦関係の自覚を明らかにする。

3.研究方法

家庭訪問による半構造化面接を夫と妻と別に行った。相手の語りたい事柄を丁寧に聞き取った。面接対象者への許可を得てテープによる録音を行った。

（1）調査対象

3 歳から 4 歳の子どもをもつご夫婦で、調査協力の意志のある 7 組 14 名を分析の対象とした。

（2）調査期間

2019 年 5 月～7 月

（3）依頼方法

2018 年 7 月に行われた X 県内の 3 歳から 4 歳の子どもをもつ母親と父親を対象に保育園、幼稚園、子育て支援センターを通じて行ったアンケート調査において、訪問による聞き取り調査への協力の意志を確認するため、調査用紙の返送時に協力の意志のある方に連絡先（住所）の明記を依頼した。後日、その連絡先に調査の趣旨や方法について明記した資料を郵送し、返送により協力の意思と連絡先（電話）の明記を依頼した。その後、電話またはＳＮＳで連絡を取り、訪問の具体的な日時や場所の調整をした。

(4) 研究デザイン

家庭訪問による個別インタビュー調査

(5) 調査内容

夫婦関係の自覚として、相手に対する気持ちと変化、夫

婦関係への満足、夫婦ペアレンティングへの思いとして、子育ての協力への考えとその根底にある思い、協力の実態と満足、協力を良好なものにするための行動や言葉がけとその背景にあるもの、子育ての協力をするうえで大切なこと、子育ての協力で阻害するもの、子どもが増えたときの協力の変化などであった。

(6) 研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、聞き取りデータを行った後は個人が特定されないよう記号化して処理し、研究結果公表後破棄することを明記した。

(7) 倫理審査

研究者の所属する大学の倫理委員会の審査を受け平成29年に承認（#274）を得た後に研究を開始した。

4．結果

(1) 対象者の属性

対象となった夫婦の属性を表1に示す。

妻平均38.9歳、夫41.1歳であり、結婚年数平均8.7年で子ども数は2.3人あった。14名の面接時間は46.9分±9.0(妻46.1分、夫47.6分)であり、妻は専業主婦4名、パートタイム1名、育休中1名、フルタイム1名であった。夫は全員フルタイムであった。核家族が6組、二世帯家族は1組であった。

対象者の属性

夫婦		インタビュー時間（分）	年齢（歳）	結婚年数（年）	子どもの数（人）	子どもの年齢（歳）			家族構成	職業/就業形態	
夫婦1	妻a	45	34	9	3	7	5	0	核家族	専業主婦	
	夫A	40	35							会社員	フルタイム
夫婦2	妻b	30	43	7	2	5	0		核家族	会社員	育休中
	夫B	46	45							会社員	フルタイム
夫婦3	妻c	65	45	14	3	11	9	5	核家族	自営業	パートタイム
	夫C	52	45								フルタイム
夫婦4	妻d	38	39	10	3	8	4	1	核家族	専業主婦	
	夫D	49	38							会社員	フルタイム
夫婦5	妻e	44	37	6	1	4			核家族	専業主婦	
	夫E	44	45							会社員	フルタイム
夫婦6	妻f	60	35	8	2	4	0		2世帯	自営業	フルタイム
	夫F	48	36								フルタイム
夫婦7	妻g	41	39	7	2	5	2		核家族	専業主婦	
	夫G	54	44							自営業	フルタイム

(2)夫婦関係の自覚と思い

妻
夫の育ちから夫の人柄がわかるa 言ったことに答えてくれる分夫はサポート者と思うa 夫は子どもとうまくやっているので心配ないa 常生活でも夫の判断や意見に従うe お互いに思いやっていることを自覚しているf 思いやりや奉仕の気持ちをお互いに持っているからうまくやれているg
好きで結婚した相手だし自分を大事にしてくれてありがたいd ありがとうはよく言うようにしているd 言わなくても子どもを見てくれている夫に感謝の言葉を伝えているe 自分や子どもに献身的に尽くしてくれる夫に感謝しているg
夫の判断に対する信頼a 短い時間でも子どものことを相談し合っているb 夫と子育てに対する考えが一致しているのでイライラした気持ちを話すことができるe お互いに思いやりや愛情をもってその都度話し合っているe 夫に否定や批判をされることはないd 夫とは大事なことは話し合っているd 夫のことを尊敬し信頼しており大切にしていきたいb 夫の子どもへの接し方や教え方が勉強になるe 私に安全について注意するのは夫が子どものことを大事にしているからだe 自分の親に対する気遣いがあるf 子育ての価値観が一致しているf
子育てで感じるポジティブな気持ちを子どもにも伝えていきたいb 苦しかった自分が娘と分かり合えたことで楽になったc お店をしているので子どもには寂しい思いもあるかもしれないf
夫を頼り立てているように思わせることで夫婦円満が保たれていると思うb 夫に育児に協力してもらうために自分なりに誘導しているb 子育てを楽しみたいから夫とはいい関係でいたいしそのために自分は努力しているb 夫に注意することもあるd 言いたいことはためずにその時に言うd 子どもの勉強をよく見ているので自分が主導権をもっているd
夫に子どもへの接し方について相談することができその気にさせるアドバイスをもらえるb 夫は頼るに値する能力があるからつい頼ってしまう自分に対して戸惑いがあるb 細かいことにイラつくこともあるけど良くやってくれているd 夫を頼りにして尊敬しているe 潔癖主義でせっかちな自分に対して夫はそのことをわかって対応してくれているg パニック障害をおこしたときに夫は文句を言わずに支えてくれたg
夫は少しずつ言わなくてもやれるようになってきているd 夫に自分が育てられていることを感じているb 下の子ができてさらに協力的になったf 夫は仕事が好きでよく働き自分と出会ってからは話すようなり角がとれたg
ママ友は頼りになる存在a 夫は　土日は休みたいようなので家のことは子どもたちにお願いしているa 働くか家にいるか好きにしていいと義母は言うa 一人目は大変だけど大きくなると助けてくれるようになったd
逆に子どもの関わりで夫に注意することもあるa 父親にしかできない子育てをもっとしてほしいb 夫は家事や育児をよくやってくれているが口には出せない不満があるb 自分の子育てを否定されている感じc 謝るのは認めるがその場で謝ってほしいc 子育ての分担はできていたが気に入らないことがあるc 子どもが増えてくるともっとやってほしい気持ちが強くなるd 家事は自分の仕事だけれど本当はもう少しやってほしいd

物を買うときに子どもに過保護になってしまう夫に対してそれを抑えたい気持ちがあるｅ
もっと夫に子どもの様子を伝えていきたいａ 夫と話し合いはしないけれども日記の交換をしているａ 子どもが増えて夫に言えるようになったａ 夫の帰りが遅いことは気になっているが嫌がりそうなことは言わないａ 余裕ができたら喧嘩もしなくなりこんなもんだと思えるようになったｇ
上の子の育ちを見て今の子育てでいいんだと思えるｂ 子育てで大切にしていることは自然に触れることｄ 子どもの気持ちを大切にしたいので親だけでは決めないｄ
「仕事も子育てもしっかりやらなきゃ」の思いから職場復帰への迷いがあるｂ 夫も私も育った環境から土地が広い方がいいと思うａ この先何があるか分からないからお互いの子育ての価値観に折り合いをつけているｂ 両親のことは夫もつらいはずｃ お互いは理解しているが親に合わせているところがあるｆ お店をしているので違うところはあるけれど分担してやっているｆ

夫
妻は自分にはない子どもに良い影響を与えられる交友関係を持っているＢ 家族のために転職したが妻は気持ちを尊重してくれたＤ 妻に注意された時には素直に聞けるＤ 妻は教員免許を持っているので信頼しているＤ 夫婦間ではニックネームで呼びあっているＦ 結婚しても二人の関係は変わらないＦ 余裕がなくなると子どもにあたるが妻がかばってくれるＦ 家事も育児もちゃんとしており不満はなくありがたいという気持ちをもっているG
妻は魅力的で一緒に居たいなと思う存在Ｂ 好きで結婚したけれど対等でいられる今の方が好きＤ 我儘なところのある自分を妻は我慢してくれているＤ 妻を頼りにしている自分がいるａ-3　妻には特に求めることはないＦ 直感でこの人が自分の相手だって思ったＦ 妻との相性があっているG
子どもより妻を大事にするＡ 妻をほめてあげたいＡ 自分の子育てに対するスタンスは変わっていないＡ 子育てはあまり決めない方が良いＡ 育児方針もないＡ 子育てを分担する考え方は良くないＡ 親の影響を受けている自分がいるＣ
子どもが増えるに従って妻も自分もが柔軟に対応できるようになったＡ 自分の好む生活スタイルがあるけれどこういうものだと過ごしているＡ 妻は一生懸命やっていると思っているがもっと経験から判断すべきだＣ 楽しいから妻とよく話をしているＦ 子どもが増えて良かったＦ 二人で出かけなくなり子ども中心の生活になっているＧ
子育ての考えに違いはあるが落ち着いて興奮せずに妻に接していくＣ 違いの訳は判らないがそんなもんだと受け入れるしかないＣ 家庭を経済的に支えるため体調とのバランスをとっているＤ 手伝いたい気持ちと休みたい気持ちのバランスをとっているＤ 育った環境から価値観の違いはあるが折り合いが大切Ｄ 経済面は自分が主導だけど子育ては妻に任せているＤ
妻には子どもを置いて外で会合があるときにお願いされるＡ 自分からは妻に何かしようかとは言わないＡ 片親では子どもがかわいそうＣ 子どもがいるんだから違いを認め合わなければならないＣ 妻に上の子も見てって言われることもあるＦ 自分の子どもだから自分も手伝うＦ 子育ては当たり前のことだから家事も育児もやれるほうがやればいいＧ
自分が怒るときは妻に申し訳なく思うＡ 妻の頑張りに答えたい気持ちがあるＢ 答えのないことが多い中で心と体のバランスが大切Ｃ 子どものことは何でも話し合い子どもを見ている妻の意見を尊重するＤ 折り合いの中で可能な限り妻を手伝いたいＤ 子どもが増えて妻の大変な姿を見て手伝いたいＤ 子どもの話はよく聞いてやりたいＦ
何かあったらいけないので子どもよりは遅く寝るＡ 妻と考え方に違いはあるがイライラする感じもなく不満もないＢ 妻を立てているが偉そうにしないＢ 妻は認められていない思いがあるので言い過ぎないようにしているＣ 夫婦が同じ方向を見ていることが大事Ｆ 妻との会話からいろんなことがわかるので会話を大事にしたいＧ 妻や子どものことが気になるので電話をするＧ

(3) 夫婦ペアレンティングの思い

夫と妻の語りから、サブカテゴリ、カテゴリが抽出され、夫婦ペアレンティングの思いを以下に示す

妻の思い

カテゴリ	サブカテゴリ
夫との協力関係への満足感	夫とうまくいっている実感がある
	夫への感謝の気持ちがある
	夫への理解と信頼がある
自分の子育てを支えているものがある	子育ての中で感じる気持ちを大切にできる
	夫婦関係に裏打ちされたコントロール力がある
	支えてくれている夫の存在がある
	成長している夫を感じる
	夫の家族やママ友・子どもの支えがある
夫に対する客観的な分析	夫へのささやかな不満がある
	夫とのコミュニケーションへの意識がある
子どもへのかかわりへの思い	子どもとのかかわりは間違っていない
	自分のおかれた環境を自覚している

夫の思い

カテゴリ	サブカテゴリ
妻との協力関係への満足感	妻への信頼と感謝がある
	妻との関係に満足している
自分なりの妻や子どもへの考えがある	夫婦の協力に対するスタンスがある
	子どもに向き合っている
妻と助け合って子育てをするための努力	子育てを通した変化への気づきがある
	妻との折り合いをつけている
	妻と助け合うことはあたりまえ
	妻の気持ちがわかるから応えたい
	妻を支えながらうまくやっていきたい

５．　考察

(1) 夫婦ペアレンティングへの思い

夫婦ペアレンティングを良好に発揮するための夫婦関係は、夫婦の信頼関係が維持され、お互いへの感謝や夫婦関係への満足感による夫婦関係の自覚があった。そして、自分の子育てを支えているものがあること、子どもへのかかわりへの思い、妻と助けあって子育てをするための努力をすることによって、二人の子育てや今の子育てへの自信や支えられている実感により、夫婦の協力関係は保たれていた。また、妻と支えあうことはあたりまえ、妻の気持ちがわかるから応えたい、妻を支えながらうまくやっていきたいなど、他の人に支えられている感覚や自らが感じる幸福感を大切にするなどの夫婦ペアレンティングへの思いがあった。

夫婦間における共感的なかかわりによって、夫婦、特に妻の関係満足度を高め、関係性を維持しているのではないか（神谷, 2013）と言われているように、夫婦が互いを理解し合うことは、互いの関係満足度に影響していることが本結果からも伺える。つまり、妻の夫との協力関係への満足感として夫への感謝の気持ちがある、夫への理解や信頼がある、夫とうまくいっている実感があることや、夫の妻との協力関係への満足感は、妻への信頼と感謝がある、妻との関係に満足していることに現れている。そして、互いに支え合い、育ち合っているという夫婦関係の自覚は、妻の夫婦関係に裏打ちされたコントロール力や、夫の妻の気持ちに答えたい、助け合うことは当たり前などの考えや自分なりの柔軟さやバランス、うまくやりたい気持ちや、妻に支えられている子育ての実感による夫婦ペアレンティングへの思いにより、妻主導の中で夫がそれに対して柔軟に対応していることがわかる。

妻から夫に伝えるスキルが高いほど夫からのサポートが受けやすいと述べており（佐藤, 2012)、本結果からも、妻の、夫を立てているように思わせることで・・」とあるように、妻は夫を尊重する気持ちから夫を立てながら、一方で夫に育児に協力してもらうために自分なりに誘導しているとあるように、夫を自分の考える方向にコントロールしている妻の調整力が大きいことが分かる。それに加えて、夫の妻を立てる気持ちやうまくやりたい思いが夫婦ペアレンティングの根底にあると考えられた。

結婚生活の経過による夫婦満足度は、結婚年数が増えるに従ってハネムーン効果が薄れ低下している（永井, 2005)。そのため、未就学児がいるカップルで妻の夫婦関係満足度が
低いことから、家族役割に関する看護者や周囲のサポート者からの説明や支援が必要になる。3 歳の子どもを持つ母親が抱く夫の協力が減ったと感じていると先行研究（清水, 2017）からも明らかにされているが、今回の結果では、むしろ夫婦の信頼関係を育んでいる姿があることに加えて、子どもが大きくなるに従い、夫とのかかわりが変化していることに気付いていることが聞き取れた。本研究から、そうした変化は、夫婦関係への満足感が根底にあることによって、夫婦ペアレンティングへの良い調整がなされていると考えられる。

本結果において夫とうまくいっている実感、夫への感謝の気持ちがある、夫への理解と信頼があることがから、良好な関係や夫の支援・信頼、パートナーの受容に類似する結果が示されていた。つまり、夫婦ペアレンティングでは、子どもが増え様々な困難を乗り越える中で、お互いが大切にしている思いや考えに支えられた互いの育ち合いや理解し合い、そして支え合いの姿と感謝の心によって、二人の関係への満足感が保たれていると考えられた。調査対象者の中には夫をコントロールしている妻の調整力が生まれ、夫もそのことを受け入れながらバランスをとっていた。

母親による父親関与への抑制要因、すなわち父親に子どもを任せられない状態（gatekeeping）だけではなく、促進要因の存在が指摘されている（加藤他, 2012)。本研究においては、母親の gatekeeping に関する語りは見られず、むしろ促進要因としての「ありがとうはよく言うようにしている」や「言わなくても子どもを見てくれている夫に感謝の言葉を伝えている」などの感謝を言葉にしている行動や、「夫に育児に協力してもらうために自分なりに誘導している」などの、夫を子育てに引き込もうとする具体的な行動や、「夫を頼り立てているように思わせることで夫婦円満が保たれていると思う」などの夫婦関係を保つための具体的な行動があった。

妻の、夫に対する客観的な分析では、夫へのささやかな不満がある、夫とのコミュニケーションへの意識がある、自覚は、妻の中で夫との関係性をプラスの方向に向かわせるための自身の中に湧いてくる不満や気づきでもあった。夫婦関係がうまくいっているという自覚は、夫婦ペアレンティングに良い影響をもたらしており、このうまくいっている自覚がもてないことは、プラスの方向に向かえない、閉鎖的な関係性が起こりうる。つまり、結婚して 5 年以内の離婚が多い（厚生労働省, 2016）ことについては、育児期にある産後クライシスの問題として発展していくことが考えられる。

(2) 夫婦ペアレンティングを良好なものとする支援

夫婦関係の質において、夫婦関係満足度の高いケースには、互いに表出コミュニケ―ションが多く、夫への信頼が高く、役割としての関係よりも個人としての関係について

信頼が高いことが示されている（田中，2016）。本結果においても、まずは夫婦としての互いの信頼や感謝の気持ちに支えられた夫婦関係への満足感が示されている。

また、子育ては夫婦でシェアする、共同して養育する考え方が海外ではある。しかし日本では性別役割分業の考えが根強く、よくあることから日本の夫婦にコペアレンティングがうまく機能しないと述べられている（江崎グリコ，2020）。今回の調査においては、性役割分業というよりは、互いの信頼関係や感謝の心、支え合い、理解し合い、育み合いの中で、二人の関係への満足感をもっていた。妻を支えたいという夫の思いと、子どものために、妻に支えられている実感の中で、二人の関係は保たれ調整されていることが分かった。

子育て期の妻は、会話時間と自己開示が関係満足度を大きく規定しているが、夫は、自己開示は妻ほど関係満足度に規定されず、妻の夫への開示が夫の関係満足度を規定していた。つまり夫は、子育て期においては会話時間が関係満足を規定していた（伊藤他，2007）。このことからも、本結果から見えてきたことを夫婦への支援として生かしていくとするならば、夫婦ペアレンティングを良好なものにする。そのためには、二人の関係を良いものとするために、コミュニケーションをとること、特に妻は自分の考えや気持ち、悩みや弱点なども含めてありのままの自分をさらけ出すことが大切である。

また、夫婦ペアレンティングが保たれている場合は、すでに夫婦の間で互いの調整力が発揮されバランスがとれていることが明らかである。さらに夫婦ペアレンティングについて語ってもらい、支え、考え、支持することにより、夫婦ペアレンティングにおける望ましい行動が強化されるのではないかと考える。

子育て期にある夫婦の夫婦ペアレンティングを良好なものとする支援の、夫婦ペアレンティング調整尺度を検討する。

６．結論

夫婦ペアレンティングを良好に発揮するための夫婦関係は、妻の「夫との協力関係への満足感」と、夫の「妻との協力関係への満足感」により、夫婦の信頼関係が維持され、お互いへの感謝や夫婦関係への満足感による夫婦関係の自覚があった。そして、自分の子育てを支えているものがあること、子どもへのかかわりへの思い、妻と助けあって子育てをするための努力することよって、二人の子育てや今の子育てへの自信や支えられている実感により、夫婦の協力関係は保たれていた。

また、妻と支えあうことはあたりまえ、妻の気持ちがわかるから応えたい、妻を支えながらうまくやっていきたいなど、人に支えられている感覚や自らが感じる幸福感を大切にするなどの夫婦ペアレンティングへの思いがあった。

引用文献

Belesky,J.，kelly，J（1994）/安次嶺佳子訳(1995). The Transition to Parenthood 子供を持つと夫婦に何が起こるか.，草思社，東京,10-60，133-167.

Feinberg M.，（2003）.The internal Structure and ecological context of coparenting.A framework for research and intervention. Parenting: Science and Practice.12,1-21.

McHale J P，Rasmussen JL.(1998).Coparental and family group-level dynamics during infancy: Early family precursors of child and family functioning during preschool.Deveropement and Psychopathology，10,39-59.

伊藤裕子,相良順子,池田政子(2007).夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響―自己開示を中心に―，文教学院人間学部研究紀要，9（1）,1-15.

江崎グリコ株式会社.＜日本・フィンランド「Coparenting コペアレンティング」比較妊娠期・育児期の夫婦間意識調査＞妊娠期からの夫婦の密なコミュニケーションが、育児期の産後うつや育児ストレス軽減に 子どもへの愛情や笑顔のあふれる過程につながる「Coparenting」社会を実現,www.atpress.ne.jp/news/176629.アクセス 2020.1.16.

加藤道代，黒澤泰，神谷哲司(2012).母親の gatekeeping に関する研究動向と課題－夫婦ペアレンティングの理解のために,東北大学院教育学研究科研究年報,61（1），09-126.

加藤道代，黒澤泰，神谷哲司(2014).夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討，心理学研究，84（6）,566－575.

神谷哲司(2013).育児期夫婦ペアデータによる家庭内役割タイプの検討　役割観の異動類型化と夫婦の関係性の視点から，発達心理学研究，24,238-249.

厚生労働省：平成 28 年度ひとり親世帯等調査結果報告,ひとり親になった時の親及び末子の年齢,
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11920000-Kodomokateikyoku/0000188152.pdf.アクセス 2020.8.5

佐々木裕子,高橋真理(2007).父親から見た第一子出生前後における夫婦関係の評価―家族イメージ法による分析を中心に―，家族看護研究，13（1）,53-59.

佐藤小織(2012).初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究　育児初期の核家

族に焦点をあてて，日本助産学会誌，26,222-231.
清水嘉子（2017）.乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究,日本助産学会誌,31（2）120-129.
清水嘉子(2020a).育児期にある夫婦ペアレンティング-互いの育児の批判をめぐって-，日本助産学会誌，34（1）,103-113.
清水嘉子(2020b).子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因，母性衛生，61（2）,340-351.
田中慶子(2016).家族形成期の夫婦関係の「質」とその後の評価，季刊家計経済研究，AUTUMN，112,33-45.
永井暁子(2005).結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化，季刊家計経済研究，SPRING，　66,76-81.
Mchale,J.P.(1997).Overt and covert coparenting processes in the family.Family process，36,183-201，15.
荒川恵美子,西村昭徳,菊池春樹他（2017）.未就学の子どもを持つ夫婦の関係調整に関する我が国の研究動向，東京成徳大学臨床心理学研究，17,188-197.
伊藤裕子(2015).夫婦関係における親密性の様相,発達心理学研究，26（4）,279-287.
宇都宮博.結婚生活の長期化と夫の幸せ妻の幸せ，RADIANT,1,12-5,12　,www.ritsumel.ac.jp/research/radiant/theart/heart/story2.htm.アクセス2020.1.16.

清水嘉子.育児期にある夫婦関係の自覚と夫婦ペアレンティングへの思い．日本助産学会誌．35（2），145-154．10.3418/jjam.JJAM-2020-0027　一部加筆